

ヘーゲル『精神現象学』「序説」第55節～第60節の解明

YAMAGUCHI, Seiichi / 山口, 誠一

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

83

(開始ページ / Start Page)

21

(終了ページ / End Page)

39

(発行年 / Year)

2021-09-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00024744>

ヘーゲル『精神現象学』「序説」

第 55 節～第 60 節の解明

山 口 誠 一

はじめに

ヘーゲルは、まず客観の側から存在の論理を「論理的定在」と呼び、主観の側から、理屈をつける思考ということで質料的思考と形式的思考を批判する。その上で、この客観と主観との両側を統合する概念的思考を導き出す。前者のうち、質料的思考に対しては主語が基体表象であることが批判され、形式的思考に対しては述語が外からの偶有性であることが批判される。それに対して後者の概念的思考では、述語が主語の内的本質であることが強調される。

【ヘーゲル『精神現象学』「序説」第 55 節～第 60 節要旨・邦語訳・注解】

《第 55 節》

要 旨

存在するものとしての実体の規定からみた悟性の意義がこれから明らかになる。定在の悟性は特定の思想である。定在は、ヌースである。定在の本性は種である。理念は種を表現している。漠然としていても外国語の方が好まれる。定在は単純な思想であり、単純さはヌースである。通常の実体も単純であり自己同等である。規定性は、他のものとの関係で成立しているかに見える。実体の自己同等性は否定性でもあるから固定した定在は解体する。思考でもある規定は自己運動である。純粹概念が、思想の自己運動であり、内面である。悟性は生成するので理性的である。

(1) 存在するものとしての実体の規定からみた悟性の意義がこれから明らかになる。

Wenn oben die Bedeutung *des Verstandes* nach der Seite des Selbstbewußtseins der Substanz angegeben wurde, so erhellt aus dem hier Gesagten seine Bedeutung nach der Bestimmung derselben als seiender.

さきには悟性の意義を、実体にとっての自己意識という側面において示したが、いまここで述べたことからすれば、存在するものとしての実体の規定からみた悟性の意義が明らかになる。

《注解》「実体にとっての自己意識」の側面からは、第 32 節で悟性は、分離する働きであった。ここ

では悟性の意義を「存在するものとしての実体の規定」の側面から明らかにされる。

(2) 定在の悟性は特定の思想である。

—Das Dasein ist Qualität, sichselbstgleiche Bestimmtheit oder bestimmte Einfachheit, bestimmter Gedanke; dies ist der Verstand des Daseins.

— 定在は質である。それは自己同等的に規定されており、特定の単純さである。すなわち特定の思想である。このことが定在の悟性にほかならない。

《注解》 存在が定在として自己同等に規定され思想になっていることが悟性なのである。

(3) 定在は、ヌースである。

Dadurch ist es *Nus*, als für welchen *Anaxagoras* zuerst das Wesen erkannte.

したがって、定在は、ヌースすなわち^{ἄναξαγόρας}がはじめて本質体をそれとして認識した意味でのヌースなのである。

《注解》 ヌースは、存在と思考の同一性としての理性である。

(4) 定在の本性は種である。

Die nach ihm begriffen bestimmter die Natur des Daseins als *Eidos* oder *Idea*; das heißt, *bestimmte Allgemeinheit, Art*. Der Ausdruck Art scheint etwa zu gemein und zu wenig für die Ideen, für das Schöne und Heilige und Ewige zu sein, die zu dieser Zeit grassieren.

彼以後の人々になると、もっと明確に、定在の本性を^{εἶδος}あるいは^{ἰδέα}として把握した。言いかえれば、特定の^{πᾶσι}普遍性、すなわち^{γένος}種としてである。「種」という言葉は、理念とされているもの、すなわち近頃はやりの美や聖や永遠といったものにとっては、おそらく、あまりに平凡で卑小のように思われる。

《注解》 種は、ヌースすなわち理性の推理の中項としてとらえられる。中項は、特殊すなわち特定の普遍性である。

(5) 理念は種を表現している。

Aber in der Tat drückt die Idee nicht mehr noch weniger aus als Art.

しかし実際には、理念が表現しているのは、種より以上のものでも以下のものでもない。

《注解》 理念が種を表現していることは推理の中項を表現していることでもある。

(6) 漠然としていても外国語の方が好まれる。

Allein wir sehen jetzt oft einen Ausdruck, der einen Begriff bestimmt bezeichnet, verschmäht und einen anderen vorgezogen, der, wenn es auch nur darum ist, weil er einer fremden Sprache

angehört, den Begriff in Nebel einhüllt und damit erbaulicher lautet.

ただし、最近よく見うけられることだが、一つの概念を明確にあらわしている表現が馬鹿にされ、概念を霧に包んでそのため有難味がもっとあるように聞こえる表現のほうが好まれる傾向がある。しかも、それが外国語からきたものだからさえである場合に好まれる。

《注解》 種 (Art) よりもイデー (Idee) が好まれるのは、後者がギリシャ語由来だからである。

(7) 定在は単純な思想であり、単純さはヌースである。

—Eben darin, daß das Dasein als Art bestimmt ist, ist es einfacher Gedanke; der Nus, die Einfachheit, ist die Substanz.

定在が種として規定されるという、まさにこのことで定在は単純な思想である。ヌースが、単純さが、実体なのである。

《注解》 定在は種であり、定在の悟性は特定の思想であり、定在の本性はヌースであり、ヌースは単純さであるから、定在は単純な思想でもある。

(8) 通常の実体も単純であり自己同等である。

Um ihrer Einfachheit oder Sichselbstgleichheit willen erscheint sie als fest und bleibend.

実体は、それが単純であり自己同等であるために、固定し持続するものとして現われる。

《注解》 実体が単純であり、自己同等であるだけであるならば、固定し持続するという通常の実体にすぎない。

(9) 実体の自己同等性は否定性でもあるから固定した定在は解体する。

Aber diese Sichselbstgleichheit ist ebenso Negativität; dadurch geht jenes feste Dasein in seine Auflösung über.

しかし、この自己同等性は、それと同様に否定性なのである。そのおかげで、例の固定的な定在がみずから解体してゆくことになる。

《注解》 ヘーゲルの実体には、自己同等性と否定性との両面がある。円環が同時に円周運動なのである。

(10) 規定性は、他のものとの関係で成立しているかに見える。

Die Bestimmtheit scheint zuerst es nur dadurch zu sein, daß sie sich auf *Anderes* bezieht, und ihre Bewegung [scheint] ihr durch eine fremde Gewalt angetan zu werden;

—ある規定をもっていることは、はじめのうちは、ただ他のものとの関係によってのみ成り立っていることのように見え、したがって、規定が運動するのは、疎遠な強制力が加えられるからであるかに見える。

《注解》 規定性は、最初は自己関係ではなくて他のものとの関係によって成立しているかに見える。

(11) 思考でもある規定は自己運動である。

aber daß sie ihr Anderssein selbst an ihr hat und Selbstbewegung ist, dies ist eben in jener *Einfachheit* des Denkens selbst enthalten;

しかし、規定には、己れのもとで己れの他であるということそのものがあり、自己運動なのである。このことは、思考そのものの例の単純さにふくまれている。

《注解》 規定が自己運動であるのは、規定の単純性にそれを否定して動かす規定の他であることが含まれているからである。それは、思考と存在の同一性からしても思考のありかたでもある。

(12) 純粹概念が、思想の自己運動であり、内面である。

denn diese ist der sich selbst bewegende und unterscheidende Gedanke und die eigene Innerlichkeit, der reine *Begriff*.

なぜならば、思考そのものの単純さとは、自分自身を運動させ区別してゆく思想であり、それ自身の内面性であり、純粹な概念だからである。

《注解》 思考そのものの単純性とは、思想がその内面から自己運動した場合であり、純粹概念である。

(13) 悟性は生成するので理性的である。

So ist also die *Verständigkeit* ein Werden, und als dies Werden ist sie die Vernünftigkeit.

こうなれば、悟性的であることはまた生成することであり、そして、生成するものなので、それは理性的である。

《注解》 悟性的なものが生成すると理性的なものになる。生成とは、思想が「自己自身を運動させ区別してゆく」ことである。

《第 56 節》

要 旨

論理的必然性は、存在の概念に由来する。この必然性は思弁的である。具体的形態は、単純な規定性から本質性へと論理的形式化する。形態の具体的定在は、そのまま論理的定在である。具体的内容から形式が生成する。形式は、内容から生成する。

(1) 論理的必然性は、存在の概念に由来する。

In dieser Natur dessen, was ist, in seinem Sein sein Begriff zu sein, ist es, daß überhaupt die

logische Notwendigkeit besteht;

存在するもののこの本性、すなわち、それが存在しながら己れの概念であるということ、これが、およそ論理的必然性なるものが成り立つことである。

《注解》 ここで存在と存在するものを区別した上で、前者が純粹概念の存在であることが明言されている。

(2) この必然性は思弁的である。

sie allein ist das Vernünftige und der Rhythmus des organischen Ganzen, sie ist ebenso sehr Wissen des Inhalts, als der Inhalt Begriff und Wesen ist, - oder sie allein ist das *Spekulative*.

この必然性こそ理性的なものであり、有機的な全体のリズムである。内容が概念であり本質であるように、この必然性は同時に、その内容を知ることでもある。言い換えれば、この必然性こそが思弁的なものである。

《注解》 理性的なものとは推理であるから、論理的必然性とは推理なのである。

(3) 具体的形態は、単純な規定性から本質性へと論理的形式化する。

—Die konkrete Gestalt, sich selbst bewegend, macht sich zur einfachen Bestimmtheit; damit erhebt sie sich zur logischen Form und ist in ihrer Wesentlichkeit;

—— 具体的形態はみずから運動していった単純な規定性となる。このことによってその規定性は自己を高めて論理的形式となり、己れの本質性ということで存在することになる。

《注解》 具体的形態は『精神現象学』に属するが、単純な規定性は『論理学』の存在論に属する。それが論理的形式へ高まると本質論の反省規定つまり本質性となる。

(4) 形態の具体的定在は、そのまま論理的定在である。

ihr konkretes Dasein ist nur diese Bewegung und ist unmittelbar logisches Dasein.

形態の具体的な定在は、この運動にほかならず、それがそのまま論理的な定在なのである。

《注解》 ここで『精神現象学』と『論理学』との対応が、意識の定在と思考規定の定在との対応であることが判明する。

(5) 具体的内容から形式が生成する。

Es ist darum unnötig, dem konkreten Inhalt den Formalismus äußerlich anzutun;

したがって、具体的内容に対し、形式主義を外からあてはめることは不必要である。

《注解》 ヘーゲルは、ここでは、『精神現象学』の内容から思考規定が形式として生成すると考えていた。

(6) 形式は、内容から生成する。

jener ist an ihm selbst das Übergehen in diesen, der aber aufhört, dieser äußerliche Formalismus zu sein, weil die Form das einheimische Werden des konkreten Inhalts selbst ist.

内容がそれ自身のもとで形式主義へ移ってゆき、同時に、この形式主義は外的な形式主義であることをやめる。なぜなら、ここでは形式は、具体的内容そのものによる土着の生成だからである。

《注解》 ここで『精神現象学』から『論理学』の生成の根拠が明示されている。

《第57節》

要 旨

学の方法は『論理学』で叙述される。思弁哲学の概念が叙述されて実現されていない以上、断言に止まる。断言に対する断言は反駁でない。断言に対する断言はよくある。未知に対しても同様である。

(1) 学の方法は『論理学』で叙述される。

Diese Natur der wissenschaftlichen Methode, teils von dem Inhalte ungetrennt zu sein, teils sich durch sich selbst ihren Rhythmus zu bestimmen, hat, wie schon erinnert, in der spekulativen Philosophie ihre eigentliche Darstellung.

こうして学の方法は、その本性上、一方では内容から離れてはならず、他方では己れ自身で己れのリズムをきめてゆかねばならない。このことが本来叙述されるのは、さきにも指摘したように、思弁的哲学でのことである。

《注解》 思弁哲学は『論理学』を指しており、学の体系の形式を方法として叙述している。

(2) 思弁哲学の概念が叙述されて実現されていない以上、断言に止まる。

—Das hier Gesagte drückt zwar den Begriff aus, kann aber für nicht mehr als für eine antizipierte Versicherung gelten.

ここで述べられたことは、いかにも概念を表現してはいるけれども、先廻りしてなされた一つの断言以上のものともはや見なされるわけにはゆかない。

《注解》 思弁哲学の概念が叙述されて実現されていない以上、断言に止まる。

(3) 断言に対する断言は反駁でない。

Ihre Wahrheit liegt nicht in dieser zum Teil erzählenden Exposition und ist darum auch ebensowenig widerlegt, wenn dagegen versichert wird, dem sei nicht so, sondern es verhalte sich damit so und so, wenn gewohnte Vorstellungen als ausgemachte und bekannte Wahrheiten in Erinnerung gebracht und hererzählt [werden] oder auch aus dem Schreine des inneren göttlichen

Anschauens Neues aufgetischt und versichert wird.

この断言の真理は、ここでいくらか物語的になされたような開陳のうちにあるのではない。だから、また逆に、この断言に対し、真理はそうでなくてかくかくなのだと断言されても、それで反駁されたことにはならない。そのさい、月並みの考え方が、すでに確定した周知の真理として持ち出され、あれこれ並べたてられようと、あるいは、神聖な内的直観という神棚から新たな真理が取りおろされ、断言されようと同じことである。

《注解》 ある断言に対する反駁は、学的叙述によってだけできる。

(4) 断言に対する断言はよくある。

—Eine solche Aufnahme pflegt die erste Reaktion des Wissens, dem etwas unbekannt war, dagegen zu sein, um die Freiheit und eigene Einsicht, die eigene Autorität gegen die fremde (denn unter dieser Gestalt erscheint das jetzt zuerst Aufgenommene) zu retten, - auch um den Schein und die Art von Schande, die darin liegen soll, daß etwas gelernt worden sei, wegzuschaffen;

—このような応じ方は、少し未知であったものが与えられた場合、知識がまずそれに対抗しようとして示す反応であって、よくあることである。それというのも、はじめて出会ったばかりのものは、疎遠な権威という形態のもとに立ち現われるのであるが、知識はそれに対して、自由と自前の洞察とを守り、自前の権威を保とうとするからであり、また、何かが学ばれたということになると恥だと考えて、そう見えそうな様子を避けようとするからでもある。

《注解》 ある断言に対する反駁が、また断言になりがちな理由を述べている。

(5) 未知に対しても同様である。

so wie bei der Beifall gebenden Annahme des Unbekannten die Reaktion derselben Art in dem besteht, was in einer anderen Sphäre das ultrarevolutionäre Reden und Handeln war.

逆に、未知のものが拍手喝采でむかえられる場合にも、反応としてはやはり同じ種類のものがある。それは、かつて他の領域において、急進的な革命家の言辞や行為することとなって現われた。

《注解》 ある断言に対する賛同も断言であってはならないと言っている。

Ⅳ 哲学的思索

〔1〕 哲学研究にさいしての条件

《第58節》

要 旨

学の研究とは、概念の労苦を己れに引き受けることである。概念の労苦は概念だけに、特定の概念だけに注意することを要求する。表象的思考や形式的思考は、概念への注意によって中断される。一方の表象にたって進む習慣は、質料的思考ともよぶべきであって、素材の中にただ沈没した偶然的な意識である。他方の理屈づけは、内容にそとから述語を付加する。内容の自己によって運動するのを考察することが要求される。概念の自己運動に対する控えめな態度が本質的である。

(1) 学の研究とは、概念の労苦を己れに引き受けることである。

Worauf es deswegen bei dem *Studium der Wissenschaft* ankommt, ist, die Anstrengung des Begriffs auf sich zu nehmen.

以上のようなわけで、学^レの研究において大切なことは、概念の労苦を己れにひきうけることである。

《注解》 概念の労苦は、概念の断言に対比される。

(2) 概念の労苦は概念だけに、特定の概念だけに注意することを要求する。

Sie erfordert die Aufmerksamkeit auf ihn als solchen, auf die einfachen Bestimmungen, z. B. des *Ansichseins*, des *Fürsichseins*, der *Sichselbstgleichheit* usw.;

概念の労苦が要求するのは、概念そのものに、「自体存在」「自立存在」「自己同等性」などという単純な諸規定に注意を集中することである。

《注解》 ここで、概念そのものとは、表象を交えない特定の概念のことである。概念の自己運動に注意することである。

(3) 表象的思考や形式的思考は、概念への注意によって中断される。

denn diese sind solche reine Selbstbewegungen, die man Seelen nennen könnte, wenn nicht ihr Begriff etwas Höheres bezeichnete als diese. Der Gewohnheit, an Vorstellungen fortzulaufen, ist die Unterbrechung derselben durch den Begriff ebenso lästig als dem formalen Denken, das in unwirklichen Gedanken hin und her räsoniert.

注意の集中が要求されるわけは、これらの規定は純粹に自己運動をしてゆくのであって、ために魂とよばれてもよいほどのものだからである。ただしこの言い方は、それらの概念が魂よりも少し高次のものをあらわしているのではないとしてのことである。表象から表象へと辿りながら考える日常の習慣に

とっても、また、非現実的な思想のなかで往ったり来たりして理屈をつける形式的思考にとっても、それが概念によって中断されるのは煩わしいことである。

《注解》 ここでは、概念の労苦が、表象的思考と理窟をつける形式的思考に対置されている。

- (4) 一方の表象にたよって進む習慣は、質料的思考ともよぶべきであって、素材の中にただ沈没した偶然的な意識である。

Jene Gewohnheit ist ein materielles Denken zu nennen, ein zufälliges Bewußtsein, das in den Stoff nur versenkt ist, welchem es daher sauer ankommt, aus der Materie zugleich sein Selbst rein herauszuheben und bei sich zu sein.

— 前者の〔表象にたよって進む〕習慣は、質料的思考ともよぶべきであって、偶然的な意識であり、素材の中に沈没しただけである。こうした意識にとっては、質料の中にあると同時に、そこから自分の自己を純粹に取り出し自分のもとにあることは、つらく感じられてくる。

《注解》 「質料の中にあると同時に、そこから自分の自己を純粹に取り出し自分のもとにあること」は、思弁的思考である。

- (5) 他方の理屈づけは、内容にそとから述語を付加する。

Das andere, das Rasonieren hingegen ist die Freiheit von dem Inhalt und die Eitelkeit über ihn;

— 後者の、理屈をつける方には、内容から自由であり、内容に対して優越しているとのうぬぼれがある。

《注解》 理窟をつけるとは、述語を主語内容にそとから付加することである。

- (6) 内容の自己によって運動するのを考察することが要求される。

ihr wird die Anstrengung zugemutet, diese Freiheit aufzugeben und, statt das willkürlich bewegende Prinzip des Inhalts zu sein, diese Freiheit in ihn zu versenken, ihn durch seine eigene Natur, d. h. durch das Selbst als das seinige, sich bewegen zu lassen und diese Bewegung zu betrachten.

これに対して要求される努力は何かといえば、この自由を放棄すること、内容を好き勝手に動かす原理であろうとせずに、自分の自由を内容へ沈めこむこと、そして、内容がそれ自身の本性によって、すなわち内容自身のものとしての自己によって、運動してゆくようにした上で、この運動を考察することである。

《注解》 概念の労苦とは、内容に沈潜し、内容自身の自己運動を考察することである。

- (7) 概念の自己運動に対する控えめな態度が本質的である。

Sich des eigenen Einfallens in den immanenten Rhythmus der Begriffe ent schlagen, in ihn nicht

durch die Willkür und sonst erworbene Weisheit eingreifen, diese Enthaltbarkeit ist selbst ein wesentliches Moment der Aufmerksamkeit auf den Begriff.

概念に内在しているリズムに自分の方から介入することはやめ、恣意や、よそで得られた知恵によってはそれに干渉しないという、この控え目な態度は、それ自身、概念に注意することによって一つの本質的な条件である。

《注解》「概念に内在しているリズム」とは、自己運動のことである。

〔2〕 否定的態度における理屈をつける思考、肯定的態度における理屈をつける思考、その基体（主語）

《第59節》

要 旨

概念把握する思考に対立する理屈をつける態度には両面がある。否定的な理屈づけは、内容を反駁する。この洞察はたんに否定的にすぎない。否定的な理屈をつける思考は、内容をそこから取って来なければならない。理屈をつける思考は、理屈をつける知についての虚栄である。知ることと知識の両方の虚栄が表現されている。上記の洞察による否定は内容のそこからなされるので事象を超えている。反省は、内容豊かな洞察よりも先んじているというぬばれである。概念把握的思考では、肯定的内容に否定的なものが属している。特定の否定的なものは肯定的なものである。

(1) 概念把握する思考に対立する理屈をつける態度には両面がある。

Es sind an dem rasonierenden Verhalten die beiden Seiten bemerklicher zu machen, nach welchen das begreifende Denken ihm entgegengesetzt ist.

概念把握する思考が対立する場合の観点として理屈をつける態度に二つの側面があることをもっと明確にしておかなければならない。

《注解》 前節で概念把握的思考について説明したので、ここでは、それと対立する理屈をつける態度に二つの側面を分けて解明しようというのである。

(2) 否定的な理屈づけは、内容を反駁する。

—Teils verhält sich jenes negativ gegen den aufgefaßten Inhalt, weiß ihn zu widerlegen und zunichte zu machen.

その一つはつぎのことである。例の態度は、それがとりあげている内容に対して否定的にふるまう場合、その内容を反駁し無に帰せしめるすべを心得ている。

《注解》 理屈づけをする態度の否定的な場合である。

(3) この洞察はたんに否定的にすぎない。

Daß dem nicht so sei, diese Einsicht ist das bloß *Negative*;

この際、それはそうなのではないという洞察は、たんに否定的なものである。

《注解》 否定的とたんに否定的を区別している。

(4) 否定的な理屈をつける思考は、内容をそこから取って来なければならない。

es ist das Letzte, das nicht selbst über sich hinaus zu einem neuen Inhalt geht; sondern um wieder einen Inhalt zu haben, muß etwas anderes irgendwoher vorgenommen werden.

それはもうそれでおしまいなのであって、それがみずから自分を越え出て新たな内容に進んでゆくことはない。むしろ、ふたたび内容を手に入れるためには、何か別のものをどこからか取ってこなければならない。

《注解》 ある内容に即した思考が自己を超え出ると、新しい自己に即した別の内容に必然的に進む。

(5) 理屈をつける思考は、理屈をつける知についての虚栄である。

Es ist die Reflexion in das leere Ich, die Eitelkeit seines Wissens.

それは、空虚な自我へ還帰する反省であり、己れの知についての虚栄である。

《注解》 自我が空虚でありながら、そこから取って来られた内容に理屈をつけるから虚栄なのである。

(6) 知ることと知識の両方の虚栄が表現されている。

—Diese Eitelkeit drückt aber nicht nur dies aus, daß dieser Inhalt eitel, sondern auch, daß diese Einsicht selbst es ist;

——しかしこの虚栄が表しているのは、内容がむなしいということだけでなく、洞察そのものがむなしいということでもある。

《注解》 前文の「己れの知についての虚栄」ということが、知識内容のむなしさだけではなくて知ることのむなしさも含んでいるのである。

(7) 上記の洞察による否定は内容のそこからなされるので事象を超えている。

denn sie ist das Negative, das nicht das Positive in sich erblickt. Dadurch, daß diese Reflexion ihre Negativität selbst nicht zum Inhalte gewinnt, ist sie überhaupt nicht in der Sache, sondern immer darüber hinaus;

なぜならば、その洞察は、肯定的なものを自己内に見てとることがない否定的なものだからである。そこでおこなわれる反省は、己れの否定性そのものを、内容として取り入れるということがないのであるから、およそ事象内にいることはなく、いつも事象を超えてそとにいる。

《注解》 事象内にいるか、事象を超えてそとにいるかという二者択一が設定され、理屈をつける態度

は、後者である。

(8) 反省は、内容豊かな洞察よりも先んじているといううぬぼれである。

sie bildet sich deswegen ein, mit der Behauptung der Leere immer weiter zu sein als eine inhaltsreiche Einsicht.

それゆえに、その反省は、空虚な主張しかしていないのに、内容豊かな洞察よりもいつも先の方まで進んでいるとうぬぼれることになる。

《注解》 ここまでで内容は事象とも言い換えられている。事象の内にいる態度は、内容豊かな洞察であり、事象を超えている態度は、空虚な主張をする反省である。

(9) 概念把握的思考では、肯定的内容に否定的なものが属している。

Dagegen, wie vorhin gezeigt, gehört im begreifenden Denken das Negative dem Inhalte selbst an und ist sowohl als seine *immanente* Bewegung und Bestimmung wie als *Ganzes* derselben das *Positive*.

これに反して概念把握的思考においては、前に明らかにしたように、否定的なものが内容そのものに属している。この否定的なものは、己れに内在する運動と規定としてもまたその運動と規定との全体としても肯定的なものである。

《注解》 概念把握的思考と理屈をつける思考の違いは、否定的なものが内容に属しているか、属していないかである。前者の内容が事象である。

(10) 特定の否定的なものは肯定的なものである。

Als Resultat aufgefaßt, ist es das aus dieser Bewegung herkommende, das *bestimmte* Negative und hiermit ebenso ein positiver Inhalt.

結果という形でとらえられることによって、否定的なものは、当の結果にいたる運動から生じてきたもの、かくかくと規定された否定的なものであり、したがって同時に肯定的な内容でもある。

《注解》 『精神現象学』では、意識の経験の結果を否定的なものと知るのは、意識であり、それを規定された否定的なものと観望するのはわれわれである。

《第60節》

要 旨

概念把握する思考には内容との関係で困難な側面がある。この側面の本性は命題の運動で表現される。理屈をつける思考には否定態度と肯定的な態度がある。表象された主語は静止した基底である。概念把握する思考では、自己は静止した基底ではない。概念把握する思考では、自己は対象固有の概念である。主語が運動して述語内容となる。理屈づけの命題は、否定される。概念把握する思考では主語が運動して述語内容になる。自己が主語でもあり、述語の本質内容でもある。述語内容は、偶有属性ではなくて、主語の本質ではない。述語内容は、主語の属性ではなくて、主語の本質・概念である。表象する思考は、述語が実体になると前進できなくなる。命題上の主語からの思考は内容上の主語に突き当たる。主語が述語に移行する。思考は、主語という出発点を失い、述語へ進むことができなくなる。命題形式上の主語は、「対象として固定された自己」であり基底である。知る自我が、形式主観として、属性述語を支える。基底主語は、述語の中にあり、自我が主語のかわりになる。第二の主語は、内容の自己とともにあるべきである。

(1) 概念把握する思考には内容との関係で困難な側面がある。

In Ansehung dessen aber, daß solches Denken einen Inhalt hat, es sei der Vorstellungen oder Gedanken oder der Vermischung beider, hat es eine andere Seite, die ihm das Begreifen erschwert.

しかし概念把握する思考には内容がある。それが表象であるか思想であるか、あるいは両者の混合であるかは問わず、とにかく内容があるということに関係して、この思考には概念把握を困難なものにしているもう一つの側面がある。

(2) この側面の本性は命題の運動で表現される。

Die merkwürdige Natur derselben hängt mit dem oben angegebenen Wesen der Idee selbst enge zusammen, oder drückt sie vielmehr aus, wie sie als die Bewegung erscheint, die denkendes Auffassen ist.

— この側面の注目すべき本性は、さきに述べた理念の本質そのものと密接に関連している。というより、むしろ、思考による把握の運動として現れるとき、どのような事態が生ずるかが、その本性によって示される。

《注解》「さきに述べた理念の本質そのもの」とは、第55節(4)(5)を指している。そこでは、理念は種とされ、命題の見地と関係している。種が命題の運動で現象する様子が当該本性によって示される。

(3) 理屈をつける思考には否定態度と肯定的な態度がある。

— Wie nämlich in seinem negativen Verhalten, wovon soeben die Rede war, das rasonierende Denken selber das Selbst ist, in das der Inhalt zurückgeht, so ist dagegen in seinem positiven Erkennen das Selbst ein vorgestelltes *Subjekt*, worauf sich der Inhalt als Akzidens und Prädikat bezieht.

いま論じたばかりの思考の否定の態度では、理屈をつける思考はそれ自身が自己であり、内容はそこに帰ってゆくのであった。それに対して、この思考による肯定的な認識の場合には、自己は、表象された主語として立てられたものであり、これに対して内容は偶有性や述語として関係する。

《注解》 理屈をつける思考の否定の態度では自己は思考自身であり、肯定の態度では、自己は表象された主語である。

(4) 表象された主語は静止した基底である。

Dies Subjekt macht die Basis aus, an die er geknüpft wird und auf der die Bewegung hin und wider läuft.

この主語が基底となって、それに内容が結びつけられ、その上で運動が往ったり来たりする。

《注解》 静止した主語に偶有的属性がつぎつぎに述語として付加される。

(5) 概念把握する思考では、自己は静止した基底ではない。

Anders verhält es sich im begreifenden Denken.

概念把握する思考においては事情が異なる。

《注解》 概念把握する思考と理屈をつける思考の違いを、まず自己のあり方に求める。

(6) 概念把握する思考では、自己は対象固有の概念である。

Indem der Begriff das eigene Selbst des Gegenstandes ist, das sich als *sein Werden* darstellt, ist es nicht ein ruhendes Subjekt, das unbewegt die Akzidenzen trägt, sondern der sich bewegende und seine Bestimmungen in sich zurücknehmende Begriff.

ここでは概念が対象それ自身の自己であり、この自己は対象の生成として提示される。それによって自己は、動かずにさまざまな偶有性になっている静止した主語ではない。むしろ、自己は概念であり、その概念は、みずから運動していった己れの諸規定を自分に取りもどす。

《注解》 概念把握する思考では、自己は対象の生成として提示される概念である。

(7) 主語が運動して述語内容となる。

In dieser Bewegung geht jenes ruhende Subjekt selbst zugrunde; es geht in die Unterschiede und den Inhalt ein und macht vielmehr die Bestimmtheit, d. h. den unterschiedenen Inhalt wie die Bewegung desselben aus, statt ihr gegenüber stehenzubleiben.

この運動では、例の静止した主語そのものは崩れてゆく。それは区別項・内容の中へ入ってゆき、むしろ己れが、規定性、すなわち区別された内容となってしまう。同様にそれは、内容の運動に対立したままであるかわりに、むしろ内容がその運動をしてゆく。

《注解》 主語が、主語の本質による述語との区別を行い内容となる。そして、その内容の運動として

主語が内容の主体となる。

(8) 理屈づけの命題は、否定される。

Der feste Boden, den das Rasonieren an dem ruhenden Subjekte hat, schwankt also, und nur diese Bewegung selbst wird der Gegenstand.

こうして、あの理屈づけが静的主語としてもっていた固定的な地盤はゆらぎ、この運動そのものだけが対象とされることになる。

《注解》 主語—述語関係が否定されて、この否定する運動を反映する運動が、命題に表現される。

(9) 概念把握する思考では主語が運動して述語内容になる。

Das Subjekt, das seinen Inhalt erfüllt, hört auf, über diesen hinauszugehen, und kann nicht noch andere Prädikate oder Akzidenzen haben.

——いまや主語は、その内容を満たしている当のものなのであるから、この内容を超えて外に出ることとはなく、なおそのほかにも述語や偶有性をもつというようなことはできない。

《注解》 主語が運動して述語内容になっていることを説明している。

(10) 自己が主語でもあり、述語の本質内容でもある。

Die Zerstretheit des Inhalts ist umgekehrt dadurch unter das Selbst gebunden;
 そのため反対に、散らばっていた内容は自己のもとに結び合わされている。

《注解》 この自己こそが、主語となり、そこから述語の本質となる。

(11) 述語内容は、偶有属性ではなくて、主語の本質ではない。

er ist nicht das Allgemeine, das frei vom Subjekte mehreren zukäme.
 内容は、当の主語から遊離していくつかの主語にくつつ普遍的なものではない。

《注解》 述語内容は、主語—述語形式そのものに対立する内容の本質体である。

(12) 述語内容は、主語の属性ではなくて、主語の本質・概念である。

Der Inhalt ist somit in der Tat nicht mehr Prädikat des Subjekts, sondern ist die Substanz, ist das Wesen und der Begriff dessen, wovon die Rede ist.

したがって、内容は、実はもはや主語の述語ではなく、むしろ実体なのであり、問題になっていた当のものの本質であり概念なのである。

《注解》 ここで、哲学生命題の述語内容は、主語の本質であることが明示されている。

(13) 表象する思考は、述語が実体になると前進できなくなる。

Das vorstellende Denken, da seine Natur ist, an den Akzidenzen oder Prädikaten fortzulaufen, und mit Recht, weil sie nicht mehr als Prädikate und Akzidenzen sind, über sie hinauszugehen, wird, indem das, was im Satze die Form eines Prädikats hat, die Substanz selbst ist, in seinem Fortlaufen gehemmt.

表象する思考は、その本性上、偶有性や述語を辿って進むがゆえに、そして、それらが、もはや偶有性や述語であるにすぎないので、いつもそれらを超えて外に出てゆくことを正当化しながら、この思考は、命題において述語の形をとっているものが実は実体そのものであるということになれば、進行を阻止される。

《注解》 表象する思考は、述語が偶有性ではなくて実体であるときは、述語が内容上の主語になるので前進できなくなる。

(14) 命題上の主語からの思考は内容上の主語に突き当たる。

Es erleidet, [um] es so vorzustellen, einen Gegenstoß.

表象する思考は、思考の前進をそのように表象すると衝撃を受ける。

《注解》 命題の主語からの前進が、内容上の主語に突き当たり衝撃を受ける。

(15) 主語が述語に移行する。

Vom Subjekte anfangend, als ob dieses zum Grunde liegen bliebe, findet es, indem das Prädikat vielmehr die Substanz ist, das Subjekt zum Prädikat übergegangen und hiermit aufgehoben;

主語がいつも根柢をなしているものなのだと考えて、そこから出発するのであるが、いまや述語のほうがかえって実体であるということによって、主語が述語に移行し、したがって主語が揚棄されている。

《注解》 命題形式での第一実体としての主語は、命題内容での述語が、第二実体であるということが判明し、命題形式でも主語が述語にまず移行し揚棄される。

(16) 思考は、主語という出発点を失い、述語へ進むことができなくなる。

und indem so das, was Prädikat zu sein scheint, zur ganzen und selbständigen Masse geworden, kann das Denken nicht frei herumirren, sondern ist durch diese Schwere aufgehalten.

そして、述語だと思われていたものが、一つの全体をなす自立的な実質になっているのであるから、思考は自由に動きまわることができず、むしろ、この重みでひきとめられるのである。

《注解》 ここでの思考は、命題形式上での主語から出発するのであるから、悟性的思考である。しかるに、命題形式上の述語は、「一つの全体をなす自立的な実質」という命題内容によって揚棄されるのである。

(17) 命題形式上の主語は、「対象として固定された自己」であり基体である。

—Sonst ist zuerst das Subjekt als das *gegenständliche* fixe Selbst zugrunde gelegt;

そうでなければ、最初は主語は対象として固定された自己ということで根柢に据えられている。

《注解》 命題内容が命題形式を否定することがなければ、主語は、命題形式上の基体つまり第一実体である。

(18) 知る自我が、形式主観として、属性述語を支える。

von hier aus geht die notwendige Bewegung zur Mannigfaltigkeit der Bestimmungen oder der Prädikate fort, hier tritt an die Stelle jenes Subjekts das wissende Ich selbst ein und ist das Verknüpfen der Prädikate und das sie haltende Subjekt.

ここから、諸規定や諸述語の多様へと必然的に前進運動し、ここで、知る自我が例の第一の主語のかわりとなり、そしてそれが、述語どうしを結びつけ、それらを支える主体となる。

《注解》 知る自我が形式であり、属性述語が内容となる。

(19) 基体主語は、述語の中にあり、自我が主語のかわりになる。

Indem aber jenes erste Subjekt in die Bestimmungen selbst eingeht und ihre Seele ist, findet das zweite Subjekt, nämlich das wissende, jenes, mit dem es schon fertig sein und worüber hinaus es in sich zurückgehen will, noch im Prädikate vor,

しかし、あの最初的主語が諸規定そのもののなかに入りこんで、それらの魂となっている。したがって第二の主語、すなわち知る主観は、第一の主語とはもう縁を切り、それを超え出て自分に帰ってゆこうと思っても、それがなおも述語の中にあるのを見出す。

《注解》 この段階では、Subjekt が、基体主語と知る主観つまり自我に分裂している。

(20) 第二の主語は、内容の自己とともにあるべきである。

だから、この第二の主語は、もはや、述語が運動する中で第一の主語に付け加えるべきはこの述語かそれともあれかと、思量し論証することを仕事とすべきではない。むしろ、すすんで内容そのものの自己を問題にしなければならない。言いかえれば、自分だけであるべきではなく、内容の自己とともにあるべきである。

und statt in dem Bewegen des Prädikats das Tuende - als Rasonieren, ob jenem dies oder jenes Prädikat beizulegen wäre - sein zu können, hat es vielmehr mit dem Selbst des Inhalts noch zu tun, soll nicht für sich, sondern mit diesem zusammen sein.

《注解》 第一の主語のかわりとなっている知る自我は、内容としての述語の自己と一体化すべきである。

結びに代えて

概念把握する思考が、命題形式の面から、説明されて、命題形式ではその真理が表現されない所以へと導かれることになる。

引用文献略号

- GW*: Georg Wilhelm Hegel, *Gesammelte Werke in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft*. Hrsg. v. der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften. Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1968ff. (*GW*の後に巻数と頁数を記してある)
- W*: Georg Wilhelm Friedrich Hegel: *Werke in zwanzig Bänden. Auf der Grundlage der Werke von 1832-1845 neu editierte Ausgabe*. Redaktion Eva Moldenhauer, Eva, und Michel, Karl Markus, Frankfurt am Main, Suhrkamp Verlag, 1969-1979. (*W*の後に巻数と頁数を記してある)
- Phän.*: G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes* (1807). Hrsg. v. H.-F. Wessels u. H. Clairmont, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1988.

凡 例

1. 原文の隔自体は、本論稿ではイタリック体で表記し、訳文では傍点を付した。

Explikation der Vorrede der *Phänomenologie des Geistes* Hegels
(die Absätze 55-60)

YAMAGUCHI Seiichi

Zusammenfassung

Hegel bestimmt nach der Seite des Objekts das Sein als das logische Dasein und nach der Seite des Subjekts das Wissen als das resonierende Denken. Und Hegel bestimmt die Einheit des Objekts und des Subjekts als das begreifende Denken. Hegel betrachtet ferner im Hinblick auf die Satzform dieses Denken, das das Prädikat als das Wesen des Subjekts ausdrückt.